

病児保育奮闘記

(18)

子どもサポート H&K
大石 仁美

若葉の輝き

子どもの成長に接する幸せ♥

わたしたちの施設での利用者第一号さんは、いまや大学生。この15年間でおよそ800人が登録し、利用してくれました。ひとりひとりの顔を覚えているわけではありませんが、それでも利用回数が多く、手を掛けた子どもの顔は忘れることはありません。

一人の子どもにたっぷり手を掛け、見守れるのは、会員制にしたおかげだと思います。

本当に子どもの個性は千差万別。親も生まれも育ちも違うわけですから、当たり前なのですが、ひとりひとりの子どもが見せる表情やしぐさ、日々の成長具合や遊びの多様性、食べ物の好みや食べ方のくせ、自己主張の仕方、泣く、怒るだけでなく、すねる、無視する、隠れる、寝て過ごす等、可愛くない表現も含めて、なんとも面白いというか興味深いのです。

どんなに似ていても、同じ人は自然界には一人もいません。

この当たり前のことは誰もが分かっているはずなのに、専門家といわれる大人たちは、ひとくくりにとめようとし、さらに細かく分類しようとする。それは専門分野の中だけにしておいて欲しいものです。

際立って特徴のある子どもへの対応の仕方などのアドバイスはとてもありがたいけれど、それ以上は要

らないと最近特に思います。なぜなら、おおらかな環境の中で、愛情たっぷりに育てられた子は、豊かな個性を自ら育み、育っていくことを実感するからです。おおらかに子育てが出来るよう、親を支える仕組みこそ欲しい。

さて、家ではわがままを言って親を手こずらせたり、わざと親がイヤがることばかりしている子もいるようですが、どんなことをしても、最終的には親は自分を許し受け入れてくれることを知っているからで、また、そのことを確認する作業なのでしょうけれど、自由奔放に自分を出せるというのは家ならでのことです。

そんな子も一歩外に出ると、お友達や親以外の大人の目を意識してか、緊張しつつ自分の力を発揮し行動していることが多いです。うまくバランスをとっているのですね。

病児保育室「子どもサポート H&K」は、家庭と外とのちょうど中間にあるようです。

甘えてみるけれど、さほどわがままは言わない。たとえば、おひるねを嫌がり、もっと遊びたいという子には「いいよ。でも、時計の長い針が一番上にくるまでだよ」というと、納得してすんなり午睡に入ってくれます。あるいは、「布団に横になってご本読んであげようね」というと、素直に布団へ。またある時

は、「寝なくていいよ。ウソ寝してね。そうすると、小さい子はお兄ちゃんの真似をして、すぐ眠ってくれるの。助かるわ」

そのうち、ウソ寝のお兄ちゃんのほうが先にスースー寝息をたてていたりして。

また競争心を刺激して、「さて、誰がいちばん先に眠るかな」と声掛けすると、すぐに目をつむりウソ寝態勢に。不思議なことに人って、目を閉じると自然と眠たくなるんですね。いつの間にか、スースーと寝息が聞こえてきます。

こんな可愛い子たちに囲まれて、これを仕事としている私にストレスなどたまるはずがありません。

部屋いっぱいに散らかしたおもちゃも、「さあ、ご飯の前に片づけようね。」と声掛けしたり、「もうすぐお迎えの時間だから一緒にお片付けてつだってくれる？」と声掛けすると喜んで手伝ってくれる子どもたち。もちろん「うわっ～はやい!」「きれいになったね!」「ありがとう。助かるわ!」などの言葉かけは忘れません。

中にはおどろくほど丁寧にする子や、お家でのしつけが行き届いているのですが、言われなくても遊び終わったら、すぐにお片付けする子もいて、意外にも「家ではいくら言っても動いてくれません」などという言葉を聞くと、へえ、そうなのか。なるほど、そんなふうにしてうまくバランスとっているんだなあ。でも、教えられたことは外ではちゃんと出来るんだ、と笑えてしまいます。

年長さんになると、子どものリクエストで、トランプやカルタなどのゲームをすることもあります。小さい子は大人が膝に抱いて、わたしもぼくも一緒に参加したよと、楽しい雰囲気を味わえるように、花を持たせたりしますが、大きい子とは真剣勝負。手加減はしません。何度しても負けると泣きだす子もありますが、手加減して勝たせても、本当の喜びはないと思うのです。たまに大人の目を盗んで、自分に有利なようにズルする子もありますが、これは見逃すことにしています。それとなく、知ってるよと伝えるようにしていますが、突き詰めたりはしない。ズルして勝ったとして

も本当の喜びでないことを本人が一番知っているからです。

安心して甘えられる、たまに厳しい時もあるけど、大人と一緒に遊んでくれる家庭的な少人数の保育所。そんな場所は、家と外との中間でしょう。

だからこそ見える子どもの素敵な素顔がある！

これが醍醐味です。

ここで最近来室した子どもを二人紹介しましょう。一人目は 5 歳の女の子です。

彼女は赤ちゃんの時から、愛らしい癒し系の女の子でした。抱っこすると、なんとも幸せな気持ちに満たされる、誰もがそう思う不思議な雰囲気を持った子でした。じっと眺めていたい。

5 歳になってもその雰囲気は変わりません。ますます磨きがかかって、その日、折り紙で作った蝶（たぶん蝶）を髪に飾って現れました。自分で作ったそうで、とてもキュート。カラフルな色合いがおしゃれで、よく似合い、まるで絵本から抜け出してきた、というよりメルヘンの世界を自由に出入りしている女の子と言った方がぴったり。

「あら、すてきね。」

「ありがとう。」

既成のものではなく、紙で作ったところがまたいい！今日は彼女はどんな遊びをしてくれるのかな。それを眺めるのがまた楽しい。だれもがきっとこの子に会ってみたくなるでしょう。どんな子かな、想像はどんどん膨らむはずです。

同じく 5 歳の男の子。小さいときから体格が良い子で、豪快な食べっぷり。見ていて気持ちがいいほど。自立心も旺盛で、意思が明確な分、かなり頑固。それがまた頼もしさを感じさせる子で、私的にはぞっこんほれぼれ。5 歳になった今、身体はラグビー選手体型。筋肉質で、スナップを効かせた投球に「おっと危ない!」と、思わず、身構えてしまうほど。

病気で来ても熱がなければ、いえいえ少々熱があってもエネルギーに満ちているときは、狭い室内でボール投げもありなのです。

本当にしんどいときは「寝たい!」と自分から布団

でコロン。そのまま数時間眠り続けます。眠ることで自然回復をはかる術を本能的に心得ているようです。逞しい子！ 将来、困難に立ち向かっていく時のエネルギーたるや、すごいものを秘めている気がする。さらに、お友達におもちゃを譲ったり、自分より小さい子を気遣ったり、優しさも際立っていて、心の成長にも目を見張るものがあり、この先どんな少年に成長するのか、どんな大人になっていくのか、想像するだけでわくわくするのです。

自身の子育てでは見えなかったこと、解らなかったことが、他人の子育てを手伝う中で見えてくる。私自身そういう年齢になったのだなあとしみじみ思います。

若葉の輝き、それは命の輝き。年寄を夢見心地にしてくれる、命たちに感謝です。